

私の住む仙台市の地域医療のスゴイところは、東北唯一の政令指定都市である自覚をもち、県や東北全体にまで、平等に医療の提供を目指した取り組みを実践していることだ。

私は仙台市の中心部で生活をしていて、交通の便、受診病院の選択に不自由なく過ごしている。しかし、中心部から離れた中山間地域では相対的に医療資源が少ない。これは全国的な問題であるが、東北では著しく問題となっている。実際に、令和5年4月1日の仙台市の中山間地域の高齢化率について調べてみると、過疎地域と言われる秋保、広陵中学校区では高齢化率がそれぞれ38.8%、46.6%と市全体の24.9%を遥かに超えていることが分かった。この問題に興味をもち、私は高校2年生の11月、宮城県が主催する「医師を志す高校生支援事業」に参加し、地域医療に従事する医師の講演を聴く機会を得た。そこで学んだことは、新たに過疎地域に病院を設立しても、医師を集めることは困難であるため、地域医療の問題には、介護サービスの利用や、既存の大きな病院との連携が必要であるということだ。つまり、相対的に医療資源の豊富なところから、医療過疎地域に医療を届ける仕組みを考えることが肝要だということである。

そのような実例がないかインターネットで調べたところ、仙台市では、2024年1月から「診療カーによるオンライン診療」を導入していることが分かった。この事業は、仙台市・仙台市薬剤師会・仙台市医師会・東北大学・NTT東日本等が連携し、5年もの歳月をかけて導入された。実証実験を通して、車内を広くするために軽トラックからハイエースに変えたり、対面に近い環境の提供ができ、眼の粘膜までオンラインで見える「窓」といわれるスクリーンの導入をしたりと、様々な改善がなされたことが分かった。

さらに詳しく知るため、市の担当部署や、仙台市医師会に直接問い合わせをし、詳しいお話を伺った。「診療カー」創設に携わった市医師会長は、日本では消極的で支持されにくい遠隔診療を対面診療に迫るくらい普及していきたいということを強く主張なさっていた。遠隔診療のデメリットをなくすため、東北大学と連携し、リットマンの最上級の聴診器・ソニーのヘッドホン・ラズベリーパイを搭載したAI等、最先端の技術を用いた遠隔聴診器の開発をしたそうだ。実際体験させてもらったが、聞こえ方を各部位に合わせて調整でき、通常の聴診器より性能が良く、心音・呼吸音・腸蠕動音がしっかり聞こえた。

話を伺った市の職員の方も、市医師会長も、「平等に医療を提供する」ということを強くお話しなさっていた。そして、東北全体に「診療カー」を広めていこうとしている。それだけ積極的に考え、取り組む医師・職員がいる仙台市は、東北全体の医療改善に努めているのだ。そして、将来は私も、その一翼を担うことのできる人材になりたいと思う。

(1181字)